HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	アニメのようなマンガのような ： 戴鉄郎氏のマンガ『黒猫警長』について
Author(s)	加部, 勇一郎
Citation	連環画研究, 5, 84-97
Issue Date	2016-02-28
DOI	https://doi.org/10.14943/2115.98438
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/98438
Type	departmental bulletin paper
File Information	renkanga_5_84-97.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

『連環画研究』第５号　2016 年２月

アニメのようなマンガのような
――戴鉄郎氏のマンガ『黒猫警長』について

加部　勇一郎

黒猫警長の変貌

2015 年８月、中国で『黒猫警長』の新作アニメ映画『黒猫警長之翡翠之星』が封切られた（図 1）。製作は上海美術電影製片廠（アニメーション・スタジオ）。五年ぶりの新作披露に際しては、上海を中心に、さまざまなイベントが執り行われた。



図１　映画館に掲げられたポスター（筆者撮影）

例えば６月、「上海国際電影節」と絡めてデパート「上海高島屋」で行われたイベントでは、なんと日本の大人気ゆるキャラ“ふなっしー（船梨精）”とともに登壇したという（図 2）。また 10 月末には、東京国際映画祭の提携企画「東京・中国映画週間」において『黒ネコ警部 宇宙船グリーンスター』の名で上映された。今年最大のヒット作『捉妖記』（邦題『モンスター・ハント』）や『西遊記之大聖帰来』（邦題『西遊記 ヒーロー・イズ・バック』）などとともに、日本上陸を果たしたことになるわけで、黒猫警長は、その活動の範囲に、中国国内のみならず、日本ひいては世界をも視野に入れているようにも見える。

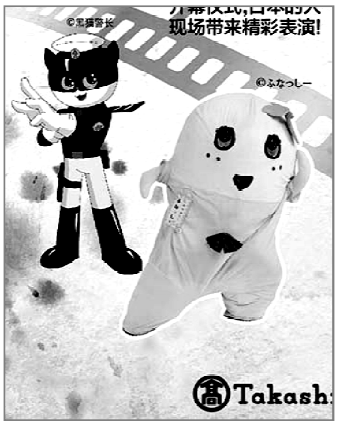


図２　高島屋でのイベントのポスター

筆者はこの『黒猫警長之翡翠之星』を、上海の映画館で見ることができた。あいにくの天気だったせいか、あるいは最終日だったせいか、50 名ほどを収容する部屋には、観客は筆者の他に親子二人しかいなかった。おかげで、スクリーン中央をほぼ独占しながら堪能した。

映画の内容は、黒猫警長が、警長ファンのブタの少年牟三嘟（モウサンドゥ）と協力しながら、悪に立ち向かうといったはなし。彼らの前に立ちはだかるのは、黒猫警長の永遠のライバルである一隻耳（カタミミ）と、彼の連れてくる大猿博士（図 3）。大猿博士は宇宙船グリーンスターを使って、人々を恐怖の底に陥れる。強者の影に隠れてちょろちょろする一隻耳

の小物ぶりも、健在である。ラストは黒猫警長と牟三嘟が、ハリウッド映画さながらの活躍を見せ、みなに平安をもたらして終わるのだが、観客が牟三嘟に感情移入できるような作りになっているため、エンドロールの頃には、そこそこの爽快感が味わえている。動き・音楽・セリフなど、いずれも洗練されていて、バランスもよく、未来的なガジェット、乗り物のスピード感など、ワクワクさせる要素も、申し分ないものであった。さらに往年のファンへの目配りも周到で、一番の盛り上がりの部分で、沈小岑氏の歌声が使われていたことは、特筆すべきだろう。彼女は80年代のアニメ『黒猫警長』（上海美術電影製片廠、84-87）の主題歌を担当した歌手だが、その伸びやかな美声はこの作品に欠かせない。彼女の声の登場に至って、この最新映画のターゲットが、ただ現在の子どもに限るものではないという作り手側の意識がうかがえるのである。



図3　登場人物
（安徽少年児童出版社版『電影図画故事書』①より）

ただしこの映画、気になる点もあった。この新作アニメ『黒猫警長之翡翠之星』の上流には、上に触れた80年代のアニメ作品がある。これは1982年に諸志祥が発表した児童文学を改編したものだが、その存在、つまりカタチや名前が、中国全土に広まる経緯を考えるにあたっては、児童文学やその挿絵より、アニメの影響力を、無視することはできない。そして80年代アニメの黒猫警長は、正義感に溢れて頼れる存在であった反面、悪と見れば即発砲といったような、やや過激な性情の持ち主でもあった。つまりアニメ『黒猫警長』は、改革開放後の中国アニメを代表し、今に生きる多くの中国人の幼年期に寄り添うものでありながら、しかし21世紀の観客からすると、「ヘン」な作品になってしまっているのである――いや、21世紀を持ち出すまでもなく、むかしの観客にとっても「ヘン」だったのではなかろうか。重要なのはおそらく、「ヘンだねえ」などと言われながら、それでも愛すべき対象であり得たことの方なのである。

そして日本の観客にとっては、その「ヘン」なあたりにこそ、「中国らしさ」が感じられたのではなかったか。むろん80年代の『黒猫警長』こそが中国を代表する唯一無二のアニメである、などと言うつもりも毛頭ないわけだが、ただ中国という未知なる世界があり、それがヘンテコでおもしろい場所らしいといった高揚を覚えるに――あるいはそれを知らない者たちに伝えるに――足る素材ではあったはずだ。

これまで黒猫警長と言えば、ほぼ、このバンバン撃ちまくるそれを指した。黒猫警

長なる名のキャラクターは、80 年代後半以降、さまざまな形象や物語、性格のバリエーションを有する[1]が、結局のところ、大多数の人々のアタマの中で動いている黒猫警長は、80 年代アニメのそれなのである。しかし 2015 年版の黒猫警長は、すっかり様変わりしてしまっていた。そして筆者が気になったのは、他でもない、このあたりのことについてなのである。

端的に言うならば、新たなヒーローは、極めてまっとうなのだ。黒猫警長は、「大人」になってしまった。声が低く落ち着いていることも一因だろう。そして少しクールになった。ときに険のある、意地悪な顔つきも見せるが、無闇に発砲するたぐいの、子どもじみた過激さは、寂しいくらいに、跡形もない。ただしこんなのは、よくあることでもあるのだ。それは単に、周縁から中央に行く過程で、より多くの人々の注目を集めるようになり、周縁で可能だったふるまいが許されなくなっただけのことだ。物語はそれが置かれる時と場所、受容する人びとの範囲によって、規範（コード）が変えられる。つまり黒猫警長というヒーローもまた、より多くの人々の前に出るべく、グローバル化を求められたということなのかもしれない。

そう言いながらも、見ていて不思議な場面も、あるにはあった。映画終盤に至り、上空で戦う黒猫警長を見守る群衆が、おもむろにスマートフォンを取り出し、ライトを点け毛沢東語録のように上に掲げて、キラキラと、黒猫警長を鼓舞すべく一斉に動き出したのである（図 4）。

彼らの集団演技（マスゲーム）が作り上げた図案は、力こぶを見せるように動く“腕”であった。どうやら“加油（がんばれ）”と言うことらしいが、このあたりに「中国らしさ」が顔をのぞかせていたように感じられたことは、ここで言い添えておくことにしよう。

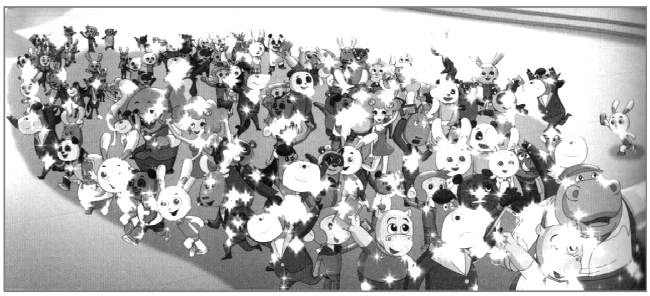


図 4　スマホを掲げる群衆
（前掲『電影図画故事書』②、p.98 より）

『動画大王』シリーズ

人々のアタマに黒猫警長というキャラクターが形成されるに際しては、上に述べたように、80 年代アニメの存在を欠かすことができないのだが、このアニメは、平行してマンガ作品が作られている。録画の機械も普及していない時代にあっては、こうしたマンガ作品の存在もまた重要であったことだろう。

書き手は、アニメを手がけた戴鉄郎監督その人[2]。李鴻光著「《黒猫警長》著作権風波」[3]によれば、戴氏の『動画大王』への連載は、1985 年の第一期から続けて 10 集が行なわれたという。1986 年 2 月に出版された第一冊目は、『動画大王』叢書なる

シリーズの下で刊行された（図 5）が、第二冊目と第三冊目が刊行されるとき、シリーズ名は『動画大王』画庫に変わっている（図 6、7）。

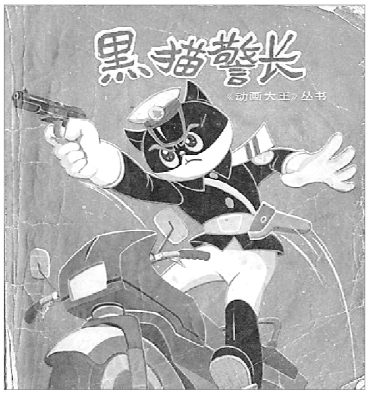


図 5　マンガ『黒猫警長』第一冊目



図 6　マンガ『黒猫警長』第二冊目

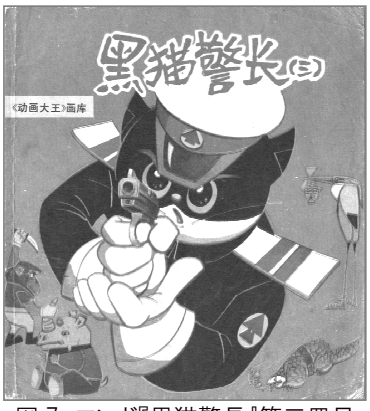


図 7　マンガ『黒猫警長』第三冊目

『動画大王』は、上海美術電影製片廠と上海人民美術出版社が合同で作った雑誌。詳細は不明ながら、「叢書」だから、この雑誌から派生した単行本ということなのだろう。ときに「画庫」がつくほか、その前に SF を表わす「科幻」の文字が加わったりもするようだ。中国で新しく作られた物語の連環画作品が収められるほか、中には、石ノ森章太郎『龍神沼』（中国では『龍神湖』）、松本零士『エスの太陽』（中国では『S 狗的悲歓』）など、中国国外の作品も収録の対象になっていたらしい。「動画」と言いつつ、動画（アニメ）作品が平行して作られたものは、この『黒猫警長』第一冊や『葫蘆兄弟』、『邋遢大王歴険記』など、わずかであったと見られる[4]。

この戴鉄郎氏のマンガ『黒猫警長』が、どのくらい広範囲に広まっていたのかについては、傅恵民輯「40 年来我国部分出版社発行在 50 万冊以上的図書目録（一）」[5]なる資料がある。これによれば第一冊目は 145 万冊、第二冊目は 93 万冊、第三冊目は 200 万冊が発行されたという。この記録は、アニメ登場から 80 年代後半までの五年ほどの間に、戴氏のマンガが、相当な数、中国全土に出回っていたことを示している。

発行部数が多いことに関係してか、このマンガは、二次創作作品が作られる際の素材として、よく用いられたようだ。周縁の創作者たちは、作品製作にあたり、このマンガから適当な図版をトレースする作業を頻繁に行っていたようなのである[6]。例えば、図 8（上）はアニメ版第四話にあたる話から、黒猫警長が双眼鏡でイナゴの襲来を眺める場面のコマだが、周縁の創作者たちにアレンジを施されて、敵であるトランスフォーマーの悪事を目撃する場面（下左）や、ただ星空を眺める場面（下右）に使われている[7]。ここには、人が作品なるものに対して行なう、単純で素朴な営みを見て取ることができるだろう。

この事例が示しているのは、戴鉄郎氏のマンガが、80年代後半以降の中国児童文化に少なからぬ影響を及ぼしているということであるが、ではいざ真剣に眺めてみるとなると、このマンガ、どうも読みにくい。また、アニメと近い所で生みだされた作品のようでありながら、以下に見るように、アニメとは違った、マンガ的な改編があちらこちらに散見される。したがって、本稿では、主に第一冊目を扱いながら、筆者がこのマンガをあれこれ眺めている中で気づいた事柄について、若干のメモを残したいと考えている。

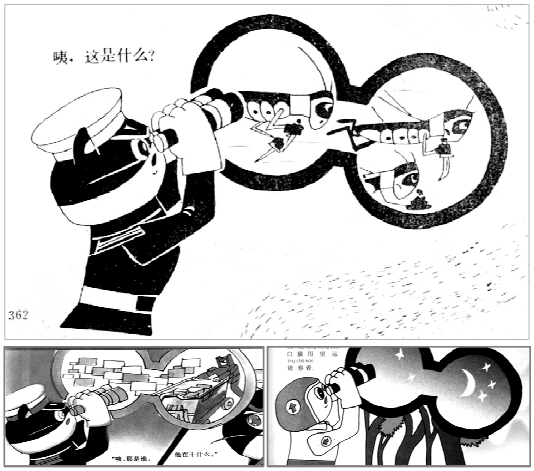


図8　一番上は第一冊目362コマより。下の二枚は周縁のマンガ作品からのもの。

戴氏の『黒猫警長』に関するマンガは、全部で四冊分が確認されている。第一冊目にアニメの五話分が収められている。第二冊目は87年3月の発行、第三冊目は88年3月の発行で、これらには、諸志祥の原作に見えない物語が収められている。第四冊目については未見ながら、1997年に『黒猫警長(1-4合訂本)』なる本が出版されている（図9）ことから、その存在が知れる[8]。男女の産み分け問題や、夾竹桃の毒による殺人事件を取り扱うなど、第二冊目や第三冊目と比べて、諸志祥の原作に沿う物語が多いようだ。



図9『黒猫警長(1-4合訂本)』

これは余談であるが、このマンガの出版が一因となり、戴氏はのちに、原作者の諸志祥と法廷で争うことになる。前掲の李鴻光氏の論文によれば、諸志祥が訴えを起こしたのが、87年6月のこと。このときすでに第二冊目までが世に出ている。第三冊目についてもすでに構想を固めていた段階だったらしい。これは中国における初めての著作権裁判とも言われ、詳細は李氏の論文に譲るが、諸志祥の勝訴で幕を閉じることになる。ただ残念なのは、どうやらこれが原因で、アニメ『黒猫警長』の製作までもが途絶えてしまったらしいことだ。戴氏の構想じたいは、まだまだ蓄えられていたようであるにもかかわらず、である。アニメ第五話末尾の「請看下集（次回に続く）」のメッセージは、アニメ製作者側が、第五話でアニメを終わらせるつもりがなかったことを、今に伝えているのである。

マンガ『黒猫警長』の特異性

では、戴氏によるマンガ『黒猫警長』には、どのような特徴があるのか。

まず考えなければならないのは、アニメとマンガ、どちらが先に生まれたか、という問題かもしれない。このマンガに冠されることばに「動画連環画」というものがあり、それはこのマンガが、アニメを下敷きとして成り立っていることを伝えている。また内表紙には動画片（アニメフィルム）に基づいて編集したことを伝える文言がある。それらに従うなら、順序は「アニメ→マンガ」となるのだろうが、ことはそう単純ではないかもしれない。というのも、アニメ全五話は、84 年から 87 年の間に、断続的に作られたと考えられており、このマンガの第一冊目が発行されたのは、86 年 2 月のことであるからである。また小野耕世氏は、珠江電影製片廠の敷地内にあるアニメスタジオにおいて、86 年 7 月に、第三話と第四話の彩色とトレスの作業を目にしているという[9]。つまり第一冊目が発行される 2 月の段階で、アニメはまだ五話まで完成していなかったということだ。筆者はこの点、両者の作者が幸いにして戴鉄郎氏であることから、彼のアタマには、すでに全体の、世に現れていない「構想」があり、それがアニメになり、かつマンガになった、といった捉え方に止（とど）めたいと考えている。また、全四冊のうち、アニメと連動しているものが第一冊目のみであることから、以下は、アニメと第一冊目のみを対象とする。

版面を見てまず気づかされることは、このマンガが、現在の日本の通常のマンガのそれ[10]とは、いくつかの異なった特徴を備えている点である（図 10）。

初めに指摘しなければならないのは、製作順序が、通常とは違っているようであることだ。日本でマンガを描くとき、普通はまず、白い紙の上に直線を引き、コマを設け、そのコマを額縁として、中に絵と文字を入れ込むことだろう。しかしこのマンガは、右に見るように、余白（間白）の太さがまちまちで、ときに傾（かし）



図 10　第一冊目より、141–149 コマ

いでいる。重なったコマも見受けられ（図 11）、そういったあたりからは、まず絵の方が先にあり、その絵を適当な大きさに切ってから、白い紙の上に並べていったように見えるのである。並べる際には、通常のマンガのような余白が生まれるよう注意されただろうが、それほどこだわってなされたようにも見えない。枠線の角（かど）が雑に交差する部分もあるようで（図 11、22 コマ左下隅など）、まず絵を配置し、後から枠線で囲んでいったということなのだろう。いずれにせよ、その種の操作により、結果、手順は逆ながら、絵と文字は、通常のマンガと同様に、枠線が作り出した額縁の中に描きこまれたように見えることになる。

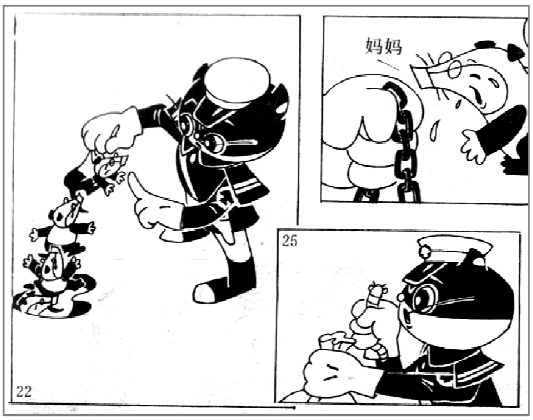


図 11　重なるコマ（第一冊目、22、25 コマ）

日本のマンガとは違う点として、すべてのコマの隅に番号が振られていることにも着目すべきだろう。ただしこれは中国のマンガではよく見られるものである。それはコマ数の多寡にかかわらず同様で、そのため数字が振られていることじたいは、べつに特異なことではない。ただし、このマンガにたびたび見られる、コマの配置の自由度の高さは、数字が振られていることに起因しているかもしれない。このマンガは、絵に付される文字が簡体字であり、かつ基本的に横書きであるため、すでに図 10 に見たように、コマの多くは左から右へ、横方向に流れる。しかしその例を外れたコマ配置が散見されもするのである。



図 12　第一冊目より、335-340 コマ。

例えば図 12 は、コマが縦方向に流れるのみならず、視線が中央のコマ（336）を二回またがねばならない作りになっている。数字があるから順序を間違えることはな

いが、読み手はそのかわり、絵と文字を追うほか、数字を真剣に追わねばならないことになる。

図 13 などは、まず数字の振られていない右下のコマに戸惑うに違いない。かろうじて 523 と関わるものであることが分かれば、あとは 524 を眺めてから、ついで右上の 525 へ飛べばいいことになるわけだが、ここに至り、絵と文字を読んでいるつもりで、しかし数字を数えていることに気づかされるのである。日本のマンガを読んでいるとき、コマの順序など、ここまで気にならないのではないだろうか。



図 13　第一冊目より、522-525 コマ

ただし、気をつけておきたいのは、これが当時のスタンダードでは決してなかったということだ。ここに、『黒猫警長』マンガより少し後に出た、同じく『動画大王』画庫シリーズの『海遊記──孫悟空東海取教記』なる本がある[11]。これは孫悟空らが海洋生物やロボットと戦うはなしであるが、このコマ割りなど、いまのわれらから見て、まったく違和感を覚えないものと言える（図 14）。余白の幅も均一で、整えようといった意図がうかがえる。翻って、戴鉄郎氏のマンガの版面構成が、いかに普通ではないかということになるわけなのである。



図 14『海遊記』より、40-44 コマ

それはなぜなのか。まず考えられるのは、彼の「構想」──メモ程度のものか、それとももっと具体的な、絵コンテのようなものか──がしっかり固まってしまっているという可能性である。すでにある絵を、角度や大きさはそのままにして生かそうと

しているため、ちぐはぐになってしまっているのかもしれない。もうひとつ考えられるのは、技術的なことは一切関係がなく、これこそが戴氏のセンスなのかもしれないということだ。というのも、第二冊目以降のように、アニメが存在しない部分の版面にも、上と同様の傾向がうかがえるからだ。このあたりについては、より多くの材料を集めた上で再考する必要があるだろう。

アニメとの異同について

このマンガは、アニメと照らし合わせたとき、いくつかの異同が見受けられる。一番目立つものは、その末尾だろう。アニメ第五話の末尾は、黒猫警長が、喫猫鼠（ねこころし）と一隻耳（カタミミ）を逮捕し護送する場面と、黒猫警長のフレームをはみ出すほどの満面の笑顔で終わるが、その後、犯人たちがどのように処遇されたのかには触れられない。一方マンガはそのことを、これ以上ない明確さで表現する。なんとマンガは、末尾において、犠牲になった白猫班長の記念碑の下で、悪いネズミたちを処刑するのである（図 15）。このような展開は、諸志祥の原作の中にもあるから、戴氏はそこにヒントを得たのかもしれない[12]。ちなみに、戴氏が翌年 87 年に出版したマンガ第二冊目は、刑の執行を受けて一隻耳はなお生きていた、といった設定を持ち、彼がひとり埋められた穴から這い上がり、月明かりの下、黒猫警長への復讐を誓う場面（図 16）から始まる。



図 15 第一冊目より、531 コマ

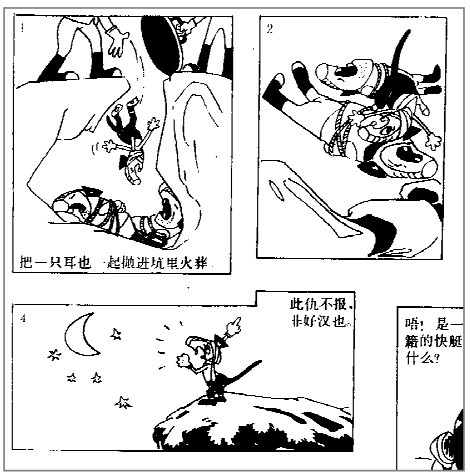


図 16 第二冊目より、1、2、4 コマ

アニメとマンガの細かな異同について、以下に三つの例を見てゆく。

まずはアニメ第二話から、巨大な怪鳥が森の子どもたちを掠（さら）って食べ物にする恐怖を描いた回である。物語中盤に、子ども向けアニメとは思えないようなショッキングな場面が差し挟まれている。

場所は怪鳥のアジト。捉えられた子どもたちは、救いを求めてきゃあきゃあと悲鳴をあげている。子どもたちの中から、サルが怪鳥につままれる。緊迫感の中、そのサルは、怪鳥の口の中に放り込まれてしまうのだが、なんとアニメは、怪鳥がサルを噛

み砕く音を、ポリポリと、まるでピーナッツでも食べているかのような音をあてることで、表現してしまうのである。

この場面はマンガ化に際し、サルがパンダに変更されるのはさておき、子どもが瞬時に骨に変わることで、喰われたことが示される（図 17）。ここは、残酷さはそのままで、しかし媒体の違いをきちんと弁えた作り手のアレンジが加わっていると言える。

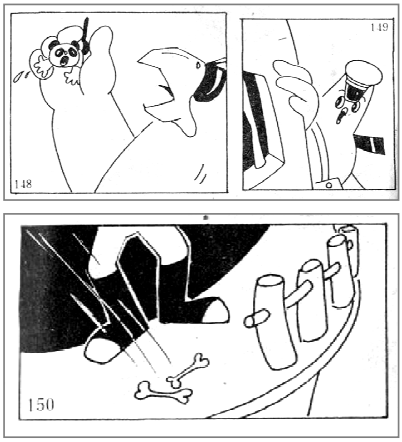


図 17　第一冊目より 148-150 コマ

また同じく第二話から、先の怪鳥と黒猫警長の戦いの場面にもまた、異同が見られる。物語は後半に入り、黒猫警長は巨大な怪鳥に対抗すべく、ヘリコプター部隊に出動をかけている。問題の場面は、怪鳥に高く持ち上げられ、上空から放られた白猫班長が、ヘリによって墜落を免れる場面にあるが、なんとアニメで白猫班長は、上下逆さにホバリングするヘリコプターの腹部にパカッと開いた穴から、ヘリ内部にストンと確保されるといった荒技により救われる（図 18）のである。一方、白猫班長の救出は、マンガでは右下のように表現され（図 19）、アニメのような荒唐無稽さは薄められてしまっている。あまりにあり得ないと考えたからか、あるいはマンガには不向きな表現と考えたからか、ここもまた、書き手のアレンジが加わっている箇所と言えよう。


図 18　アニメ第二話より

最後にもう一つ、第一話末尾、黒猫警長の永遠のライバルであるネズミが、警長の拳銃によって一隻耳（カタミミ）になる、極めて重要な場面を挙げておく。



図 19　第一冊目より、197 コマ

アニメで警長がネズミに放った銃弾は、いったん標的の上部を過ぎ去り、ほくそ笑むネズミの油断を待ち、180 度方向を変えて再び対象に迫り、彼の片耳をはじき飛ばす。物理法則を無視して、銃弾が、あり得ない角度に曲がることなど、子ども向けアニメの世界では“普通”にあることだろうが、注意したいのは、そういうアニメの銃弾は、対象を真に傷つけることもないということだ[13]。アニメ『トムとジェリー』を思い出してほしい。ジェリーがトムを爆

破しようが、大量の槍で突き刺そうが、トムが死ぬことは決してないのであって、ここで仮にトムが、話の冒頭で、前の回ではじき飛ばされた耳に包帯を巻いて現れたら、もう『トムとジェリー』の世界は崩れてしまうのである。

しかしアニメ『黒猫警長』は、この場面において、そのあたりの約束事が通用しない物語だと言うことを表明してしまっている。銃弾が逆方向に曲がる一方で、そのタマは当たれば血が出るし、殺傷能力を持っているからだ。ここはその意味で、『黒猫警長』が“普通”に収まらない作品であることを端的に示し、このアニメの奇妙さを存分に表わした箇所なのである。

マンガではこのように、何の変哲もない銃弾として描かれる（図 20）。ネズミはただ耳を撃たれて終わり。つまらないこと、この上ないが、アニメの急カーブする銃弾は、そこに若干の時間がかかるからこそ、われらの目には面白く映るというわけだ。むろんマンガでも、コマを分けたりなどすれば、表現しうるのかもしれないが、妙な冗長を生むことにもなるのだろう。なおこの場面は、上に指摘したのと同様の、コマ配置の自由度の高い箇所でもあると言える。



図 20　第一冊目より 96-99 コマ

ちなみに、2010 年版映画のフィルムブックは、ここの補正を行わなかったために、黒猫警長の銃口と、ネズミの耳をはじき飛ばす銃弾とで、方向が逆になっていて、少し不思議なものとなってしまっている（図 21）。

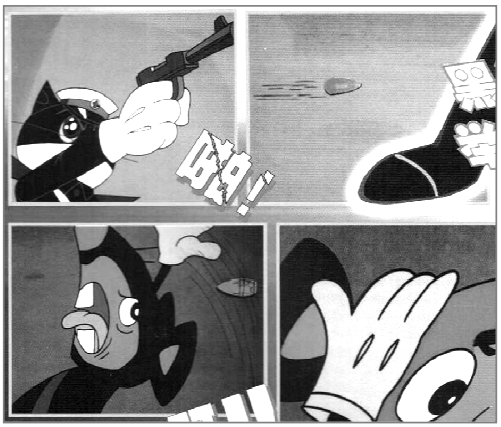


図 21　フィルムブック第 1 巻 16 頁より

以上の異同からは、媒体の違いをきちんと弁えた戴鉄郎氏が、アニメとマンガとで丁寧に描き分けをしている、そのさまをうかがうことができるだろう。

結びにかえて――アニメの動きはいかに表現されたか

戴鉄郎氏のマンガ『黒猫警長』は、上に見たように、アニメと連動した作品でありながら、アニメとは異なった表現を随所に織り込んでいる。その一方で、アニメの動きを移したと思しい表現もあるにはあって、それもなかなかに楽しいようなので、最後にいくつか拾ってみたい。





図 22　第一冊目より
86 コマ(上)と 475 コマ(下)

まずは簡単な例から。図 22 の二例では、残像を描くことで動きの素早さを表わすという、よくあるやり方が用いられている。図 23 もほぼ同様だが、若干の注意が必要で、例えば左、一匹のカマキリの素早い動きが、三匹重ねて描かれることで表わされている一方、彼の足元のイナゴはもとから複数なのである。右も黒猫警長が重ねて描かれることで、その落下が示されながら、しかし後方の、枝の間からわらわらと顔をのぞかせている白猫たちは、いずれも静止している。これらはその意味で、上の二例と比べると、やや複雑と言える。





図 23　第一冊目より、368 コマ(左)と 269 コマ(右)

図 24 もまた、同一画面に黒猫警長が重ねて描かれる点で、図 23（右）に似ている。ただし、イノシシの足元の土煙（つちけむり）やら、多方向に延びる長短の線やら、コマに込められた情報の量が大変に多く、二匹の警長が描かれることで表わされる動きの速度も、上記の例に比べて、やや緩やかに見える。

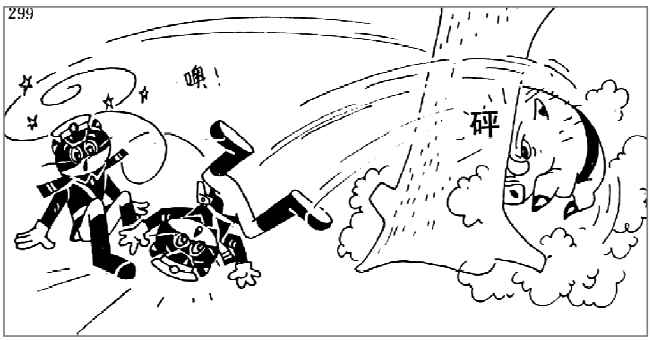


図 24　第一冊目より、299 コマ

図25は、中央の画面に三匹の黒猫警長が描かれている。左下の警長がイノシシに撥ね上げられ、上部の枝のところでカーブして、画面全体に逆のＶ字を描きながら、同じイノシシの背に襲いかかるあたり、非常にダイナミックな動きを示している。アニメ第三話に由来するもので、アニメでは枝の上で若干の間が置かれるため、マンガの方が、よりスピーディに描かれていることになる。

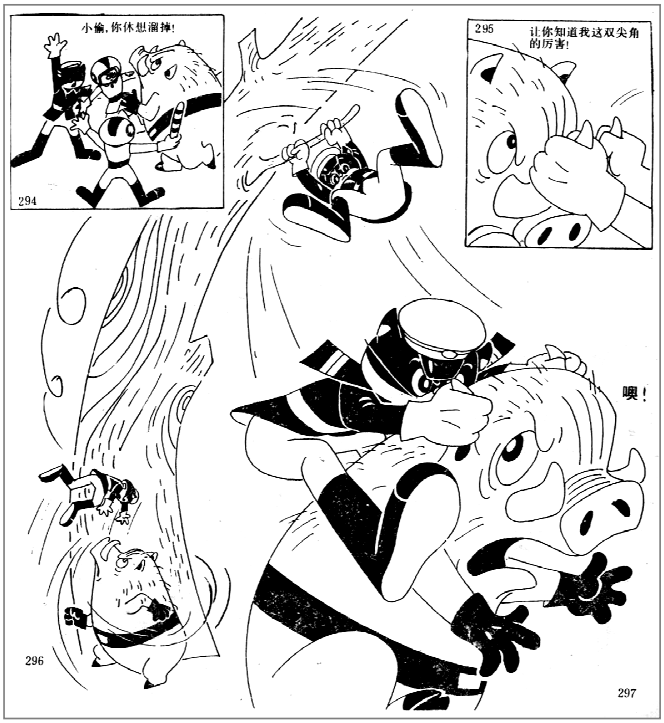


図 25　第一冊目より、294-297 コマ

だがこの絵は、やや読み解くのに困難が伴うのではあるまいか。この絵を一目見て、黒猫警長の動きを把握しきれる読み手が、果たしてどのくらいいるのだろう。

読み手にはおそらく、大きく二種類いて、大半の子どもは、ぼんやりとページをめくり、黒猫警長のかっこいい姿を見て、ただ喜んでいたことだろう。まして上に見てきたような、アニメの筋と動きがどうマンガ化されたかなど、どうでもよかったに違いない。だが一方で、アニメフィルムを幾度も見るなどして、「流れが頭に入っている読み手」もまた想定できるのだとすれば、そういった読み手にとっては、このような版面で十分だったように思われるのである。その筆頭は、ほかならぬ戴氏であって、ひょっとしたら彼は、アニメの存在を念頭に置いた上で、このような「飛んでいる」箇所について、記憶による脳内での補完を期待してもいたのかもしれない。ならば版面には、最低限のイメージが、そこそこ順序通りに置かれていればいいことになり、本稿で述べたコマ配置の奔放さについても、ある程度の説明がつくというものだ。

アニメにより提示された黒猫警長の物語は、連動するマンガ作品の登場により、アタマの中でくり返し再生され、自由に停止されるようになる。加えて後には、周縁の創作者に奔放に複製され、加工されることで、児童文化に彩りを添えていくことになる。一方で、そのアニメとの関連の深さこそが、このマンガを、逆に単独作品として読みにくいものにしてしまっているらしい。われらはそのことをもって、「マンガとしてはダメ」などと言い捨てることもできるのだが、このようなものがかつて中国に存在し、多くの人々の目を楽しませたことについては、記されるべきであるだろう。

[1] 黒猫警長の形象や物語のバリエーションについては、以下の拙稿を参照されたい。「森のみんなは、あなたに敬礼！──“黒猫警長”の偉大なる活躍を追う試み（1）」（『火輪』第 28 号 pp.46-72、『火輪』発行の会、2010.9）、「終わりなき戦い──“黒猫警長”の偉大なる活躍を追う試み（2）」（『火輪』第 29 号 pp.30-53、『火輪』発行の会、2011.3）、「『黒猫警長新伝』翻訳──“黒猫警長”の偉大なる活躍を追う試み（3）」（『火輪』第 30 号 pp.20-39、『火輪』発行の会、2011.9）

[2] 戴鉄郎（1930-）は英領シンガポール生まれのアニメ作家。北京電影学校を卒業した後、上海美術電影製片廠に入る。代表作は『黒猫警長』のほか、『我的朋友小海豚』（1980）など。張小叶「《黒猫警長》導演戴鉄郎：芸術是我余生的帰宿」（『参花（文化視界）』2012 年 11 期 pp.50-54）参照。

[3] 『法律与生活』2011.1（下）pp.50-51。

[4] 大阪府立中央図書館・国際児童文学館（東大阪市）には、「動画大王画庫」シリーズの一冊である『八仙的故事』（上海人民美術出版社、1990?）が蔵されている。これは箱入り 9 冊セットの体を持つものであるが、中の数冊に「親愛的小朋友」に始まる宣伝文（書き手は「你們的大朋友」）が収められ、この一文からは、当時どのような物語が出版されていたのかを確認することができる。それによれば、『動画大王・科幻画庫・人体輯』四冊、『牛魔王新伝』、『新大鬧天宮』、『新木偶奇遇記』、『装上金牙的軍犬』、『奇異的巧克力工廠』、『咪咪流浪記』などの物語が新たに出たらしい。『奇異的巧克力工廠』はロアルド・ダール『チョコレート工場の秘密』、『咪咪流浪記』はエクトール・アンリ・マロ『家なき子』の中国語版と思しい。

その他、ウェブサイト「豆瓣読書」（http://book.douban.com）では、「動画大王画庫」の名が冠された絵本を 50 冊ほど確認できる。また、ブログ「王大碗的保険櫃的博客」（http://blog.sina.com.cn/osbxgbxg）には「動画大王」シリーズについての精力的な記事があり、ここでは「豆瓣読書」の載せない多くのタイトルを多く見ることができる。いずれも根拠が示されないため、使用には注意が必要だろうが、大まかな把握には役立つものと言えるだろう。（上記のウェブサイトはいずれも、2016 年 1 月 4 日に最終確認している）

[5] 『出版工作』1989 年第 10 期 pp.53-87。

[6] 黒猫警長の物語の周縁に位置する二次創作作品の特徴については、拙稿「越境する主人公──“黒猫警長”世界の、そのはしっこについて」（『連環画研究』第一号 pp.47-61、2012）を合わせて参照されたい。

[7] 左は『教育好故事黒猫警長』（責任編輯：社芳清、新疆青少年出版社、1998）、右は『黒猫警長的故事』（責任編輯：劉清逸、人民日報出版社、1999）を使用した。

[8] 上記サイト「豆瓣読書」によれば、『黒猫警長』の第四冊目は 1991 年 3 月の発行。

[9] 小野耕世『中国のアニメーション──中国美術電影発展史』（平凡社、1987）p.169。

[10] マンガに関する基本的な事項について、夏目房之介「マンガ文法におけるコマの法則」（竹熊健太郎・夏目房之介ほか『別冊宝島 EX　マンガの読み方』pp.196-205、宝島社、1995）を参照した。

[11] 呉文煥改編、朱延齢・薛珠絵画『海遊記──孫悟空東海取経記』（『動画大王』画庫、上海人民美術出版社、1987 年 3 月）

[12] 黒猫警長が犠牲となった仲間の仇を討つべくネズミを処刑するはなしは、例えば『黒猫警長』（福建少年児童出版社、1982）「12　可怕的伐木声」冒頭などに見える。

[13] マンガ表現における「死なない身体」については、大塚英志＋ササキバラ・ゴウ『教養としての〈まんが・アニメ〉』（講談社現代新書、2001）pp.25-28 などを参照した。

＊ 本稿は、科学研究費（課題番号 26580063）の助成を受けたものである。また、2015 年 5 月 30 日に、京都国際マンガミュージアムで開かれた学術シンポジウム「〈連環画〉、そのさまざまな顔～他ジャンルとの接点をさぐる～」での報告「子ども文化と漫画・連環画──「黒猫警長」シリーズを例にして」をもとにしている。ご来場いただいたみなさんからは、さまざまな意見をいただくことができた。この場をお借りして、お礼申し上げる。